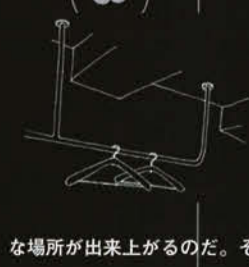
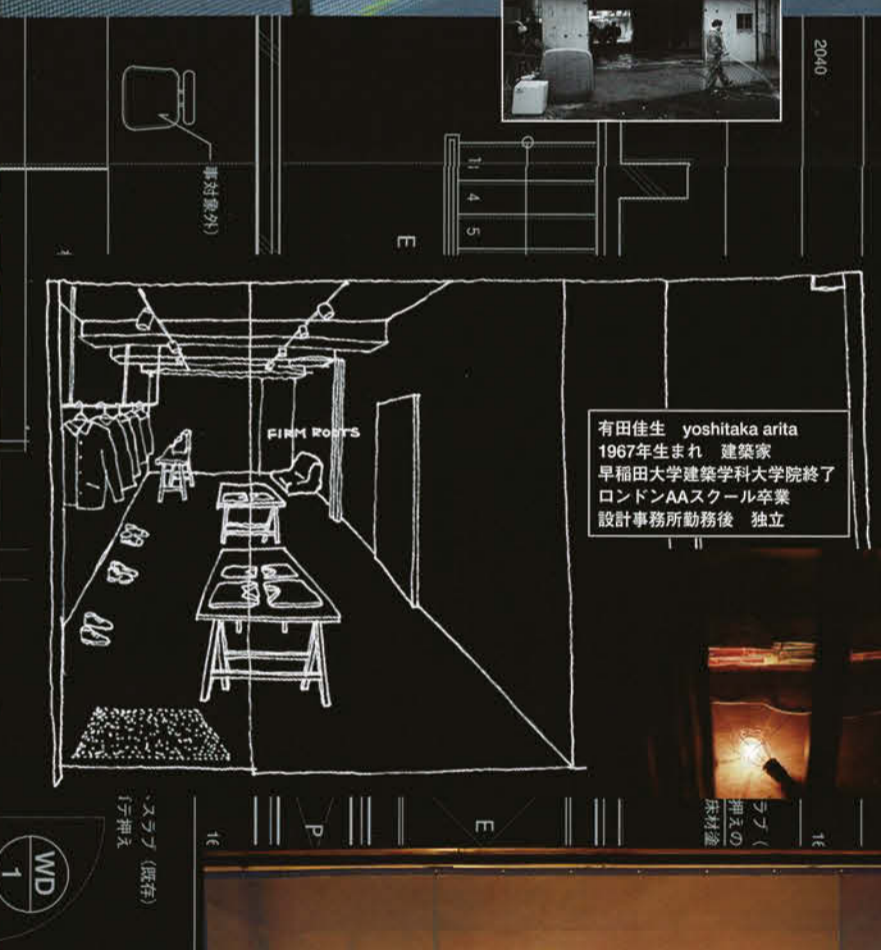


# A-works 008 FIRM ROOTS

author: arita yoshitaka, director: aizawa kumi, planner: baba masataka, photo: KATSU

新しいなにかをつくることを放棄し、そこで手を止め、時間を止める。その偶然性を凍りつかせ保存すること。それも時として選択のひとつではなかったらうか。ここでの仕事は、解体されたトンネル状の工事現場の両端を2階のガラスによって繋ぎ、それ以外の意図的な作業を排すことだった。

冬のある日、置き去りにされていたアパレルメーカーの事務所の内装を解体した。解体業者（破壊を専門とする職人、なんとカッコいい職業）がやってきて、奇妙な姿をした解体マシン（ものを破壊するためだけにつくられた機械、なんと美しい装置）によって、その空間は瞬く間に壊されていった。解体された後に姿を現したのは、幾重にも塗り重ねられた壁紙や塗料、いくつものアンカーの痕跡。80-90年代の間に、何度もつくっては壊してを繰り返した放浪の時代の美しい断面。暴力的に露呈されてしまったこの空間を、そのままのかたちでプレバート化するふと、この場所と空間と、そこに並ぶことになる衣服の特性を的確に引き出す方法ではなかった。そう考えデザインをいったん放棄し、そのままのかたちで保存することとした（もちろんクリアすべき技術的な問題や経済的な問題は山ほどあるのだが）。



代官山のすこしはすれ、細い坂道をクネクネ下った突き当たりにある築30年のビルの1階に、ストリートカジュアル系の服を売るショップをつくりたいという話を聞いて、最初にこの場所を見に来た時には、その内装はかなりつくり込まれていて、入り口は狭く閉鎖的で、内部も細かく区切られていた。そこは10年ほど前、パブル後期につくられたアパレルメーカーの事務所だったらしい。うまくショップとして再生できるのかしらと思っただが、かろうじて手に入れた30年前に引かれた何枚かの青図から、どうも元々のコンクリート構造躯体はかなりシンプルで、解体してしまえば、とても魅力的な空間が出現することが分かってきた。この建物は、平行する2本の道に挟まれた形で2面のファサードを持つ。つまり、この1階をぶち抜いて2本の道をつないでやれば、通り抜けてできるプラットフォームみたいな素敵な場所が出来上がるのだ。そこをショップにしたかった。それで0解体しようということになった。

昔の図面から、壁の中に3つの窓と1つの扉が隠れていること、道路に面する躯体開口がもっと大きくとれるはずだということなどは分かったのだが、ダニエル・ビュラン調の壁紙が出てくるなんていうところまでは、ちょっと予想できなかった。「おおい、いったいここは何屋だったんだ!?」という感じで何層にも重ねられた壁紙や塗料は、これまでのこの場所が纏ってきた出来事の変遷を物語っていた。

このすっかり裸になったスケルトン状の現場は、僕たちのお気に入りである。古いビルの1階に突然ぽっかりと穿たれた穴は、圧倒的に迫力があり、それだけで十分魅力的なのだ。今回の計画では、あまりつくり込まないで、手を加えるところを最小限にして、この穴をショップに仕立てようと思っている。「決めすぎないこと」で、ある種の「軽さ」、このショップの持つ「身軽であろうとする意志」を表現できればいいと思っている。

平面はいたってシンプル。南北に通る穴をリニアに2分割して、ショップと事務所にするというもの。このシチュエーションでは、多分これしかないだろうというような、はっきりした平面だ。真っ白い壁を一枚「スズツ」と挿入し、両端を「バン、バン」とガラスで塞ぐという、ただそれだけである。この「スズツ」「バン、バン」がうまく表現できるかどうか、この計画の命なのである。

1999年5月、この場所はショップとしてオープンする。

解体現場を利用して、4日間だけプレオープン展示会を行うことになった。僕たちにとっては嬉しいハプニングだ。足場を組み、工事用の防護ネットをスクリーンとして、完成形をシミュレーションしてみた。夕刻の薄明りのなかでボンヤリと浮かぶ解体現場と、そのスクリーンの向こう側を泳ぐ人影は、狂乱の時代として歴史に記されることになるであろう。刹那的な80-90年代の幻影を見ているようだった。その風景があまりに奇麗で、「もしクライアントが『このままでいい』なんて言い出したらどうしよう。仕事なくなっちゃうよ」などと冗談を言いながら（実際、その時は冗談でもなかったのだけど）、やはりこの魅力的なトンネルは、できるだけそのままのかたちで残してゆくことを再確認したのである。

# A-works

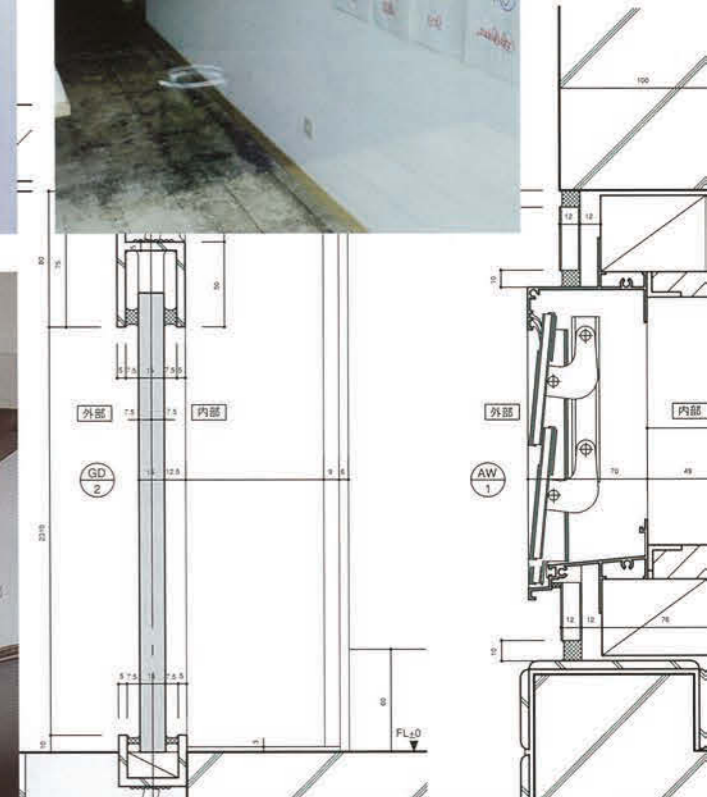
## building is editing

都市を編集する作業。  
それは、様々な偶然の出来事を紡いで  
必然へとつくり変えていく作業でもある。

いくつかのプロジェクトが我々の周りで発生し始め、  
それらに様々な役割でかかわりを持つ機会が増えてきている。  
企画、設計、デザイン、コーディネーション、出版、力仕事、等々。  
そのかかわり方が多様であればあるほど、  
それらの組み合わせの可能性も広がっていく。  
単独のプロジェクトでは解決できないような問題も  
複数のプロジェクトを結び付けることで  
劇的に糸口を見出すこともあるし、  
思い掛けなくオモシロイ出来事が  
驚くほどのスピードをもって展開していくこともある。

wild side meeting vol.1と+atdic vol.1は同じ会場で立ち上がり、  
GALLERY・MAは+atdic vol.1の問題を解決し、  
trans architecture展とAが結びつき1冊の本になり、  
+atdic vol.2がFIRM ROOTSで開催される。

ここに紹介するいくつかのプロジェクトは、  
そんな、一連の流れの中にある都市への試行の一部である。



## 014 A-works FIRM ROOTS

architect: arita yoshitaka, director: aizawa kumi,  
planning: baba masataka, photo: KATSU, arita yoshitaka

代官山FIRM ROOTSが完成した。  
服飾を中心に書籍等も扱うショップだ。

築30年のビルの1階を解体してできた  
トンネル状の空間。  
その両端をガラスで塞いでショップをつくった。

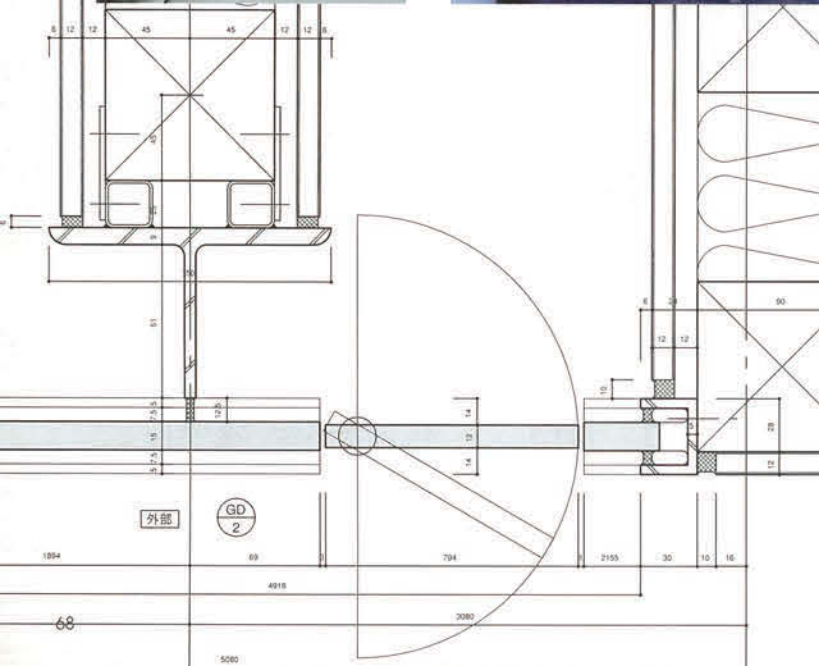
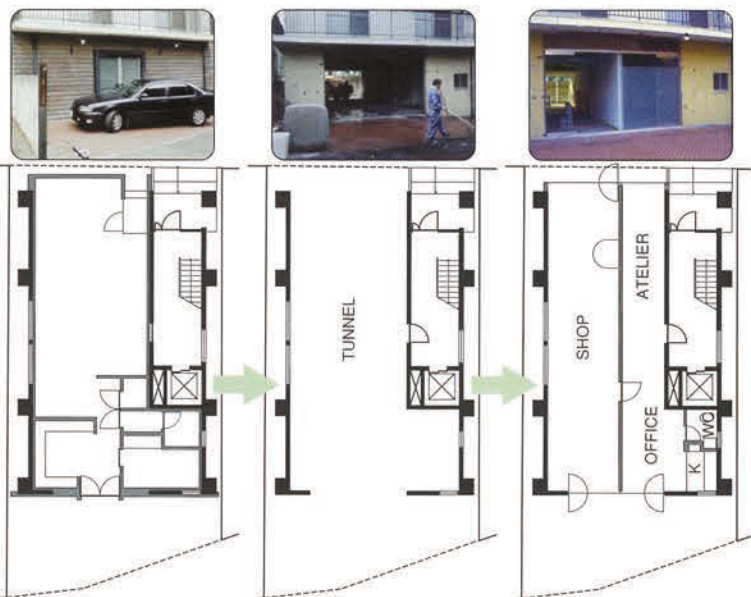
偶然現れた解体後のスケルトンの空間、その状態をそのまま標本にしたような店にする。  
それが最初のイメージだった。  
時間を重ねた既存部分に対して、新しくつくるものをどう嵌め込んでいくのか、その対比のバランスをコントロールすることで、僕らの表現にしたいと思った。

スケルトンがトンネル状の物件なんて滅多にない。  
それも、坂を下った突き当たりにあるトンネルだ。  
だからショップになってもこのトンネルは通り抜けられるようにしたかった。



結果的に、内部は床も天井も解体時そのまま。内部を2分割し、音を遮断するために白い壁が1枚挿入された。それだけのシンプルな構成となった。もちろんショップには出入り口が2つあり、こっちの道から入ってあっちの道に出られる。その、通り抜けるトンネル状のプラットフォームに商品が配置される。

FIRM ROOTSはショップとしてだけでなく、様々な情報を発信する場として機能し始めている。



## +atdic @ FIRM ROOTS

photo:arita yoshitaka

8月6日、FIRM ROOTSを会場に+atdicが開催された。第1回目のゲストはグラフィティアーティストの渡辺アルト。ショップ内の商品は片付けられ、プラットフォームは落書きのギャラリーになった。仮設のDJブースとバーができ、音楽を聞きながら、ビール片手にアルトのライブペインティングを見たり、座り込んで話をしたり。そんな一晩だけの空間が出来上がった。

FIRM ROOTSはこれからも色々なタイプのイベントの場として使われていくらしい。

